

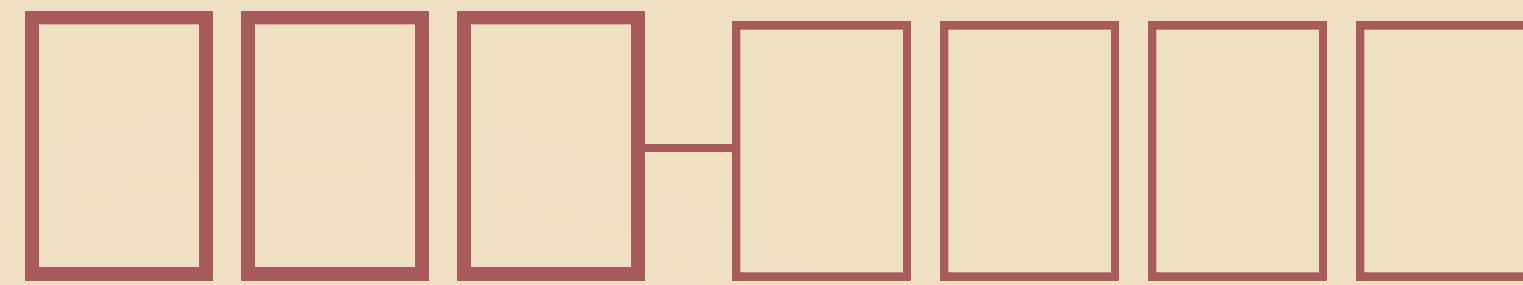
大河平一郎が

て来ると母は留守でいなかった。二階の上り口の四畳の室の長火鉢の上にはいつも不在の時するように彼宛ての短い置手紙がしてあった。「夕飯までには帰りますから、ひとりでごはんをたべて留守をしていて下さい。母」彼はお腹が減っており、置かれてあるお膳の白い布片を除けて蓮根の煮めに添えて飯をかきこまずにいられなかった。そうして四、五杯も詰めこんで腹が充ちて来ると、今日の学校の帰りでの出来事が想い起こされて来た。

自分は恋しているのだ、和歌子を！この事実の方が貧乏である事実よりも更に有力で権威がなくてはならないはずだ。
たとえお邸の坊っちゃんであろうとも、あの単に美少年で感情が優しいだけの深井に自分が和歌子を譲るわけは寸毫もない、と彼は考えた。彼は常々「貧乏である」というだけのことでは、世間が一切の自然な対等的な要求を踏み躊躇ることを当然にしているような事実に反抗せずにはいられなかった。平一郎は長い間ぶる／＼慄えながら考えていたが、もうじっとしていいる時でないという気がした。彼は手紙に自分の思う通りを書いて和歌子に送ろうと決心した。彼はペンでノートを切りさいた紙に書きはじめた。「小生は」と学校で習ったとおり書こうとしたが気にいらない、「私は」としても気にいらない、彼は平仮名で「ぼくは」と書きはじめた。

学校から遅く帰つ

今日の学校の帰り道、二度も落第した体の巨大な長田が美少年の深井に脅迫しているところを見たのだ。平一郎は深井に同情せずにいられなかった。平一郎は思わず長田頬を殴り、深井を助けたのだった。平生あまり親しくはしていないかったが、深井を家まで一緒に送って行くことは自分の責任であるよう感じた。二人は路々一言も口をきかなかつたが、妙に一種の感情が湧いていて、それが一種の気恥かしさを生ぜしめていた。時折信頼するように見上げる深い瞳の表情は、平一郎にある堪らない美と誇らしさをもたらした。



ぼくは大河平一郎です。あなたはきっと知っているいらっしゃるでしょう。ぼくはいつもあなたのことを見ています。あなたはあの小学校の談話会のことを憶えていらっしゃるだろうか。ぼくはあなたの話を今でもはじめからしまいで暗誦することが出来ます。ぼくはあなたともっと仲よくなりたくてなりません。このままではぼくはやりきれません。あなたはどう思いますか、仲よくすることを望みませんか。ぼくは貧乏です。あなたはぼくのようなものと仲よくするのを恥だと思いますか。もしやうならやうだと言って下さい。しかしほくはきっと偉くなります。きっとです。そしてあなたをよろこばします。どうぞ返事を下さい。日曜日の朝、ぼくの家の前の電信柱のところに来て下さい。

「こうしてはいられない」平一郎は飯をすましたあとの茶碗や皿を小さな古びた棚にのせて、棚の中からもう一房残っているバナナをつかんで、奥といつても一室しかない八畳の、窓際に据えてある机に向った。平一郎はバナナの柔らかいうちに弾力のある実をむさぼりつつ、どうもじつとしておれないような気がしてならなかつた。彼は自分が和歌子とは未だ一度も話したこともないのに、**あの深井が、**あ、お和歌さんかい、庭つづきで遊びに来る、と言つたことが不安でならなかつた。

杉垣の青々した昔の屋敷町に深井の家があった。平一郎は、深井の後から黙つてついていった。すると深井が黒い門のある家の前で、はじめてにっこり微笑みながら、「ここです、僕の家は」と言った。平一郎はぎょっとした。そして思わずこう尋ねた。
「君の家の隣は吉倉さんといやしないかい」
「ええ、吉倉さんですよ」「ほうー」と平一郎は自分の血の上氣するのを覚えながら、「和歌子さんて居やしないかい」
「ああ、おとなりのお和歌さんかい、僕の家と庭つづきだからいつも遊びに来るよ、君、お和歌さんを知っているの？」
「——」

平一郎は息苦しくなつたが我慢して平気そうに、「さよなら」を言って自分の家の方へ引き返して來た。自分は今のさき迄は少年のために戦った任侠な強者であったが、今はこの美少年を自分の恋の競争者として迎えねばならなくなつたらしいことを。彼がこれまで深井に意識的に近づかなかつた訳は、深井が**「よい家庭」**の少年であることであった。